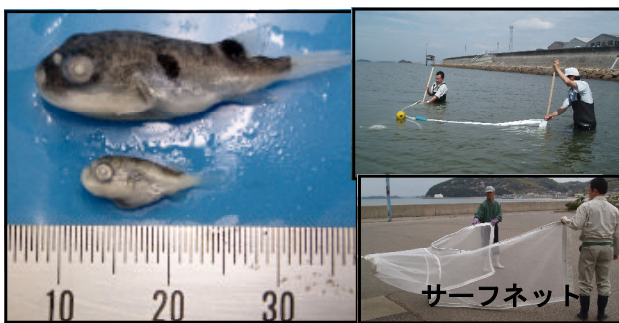


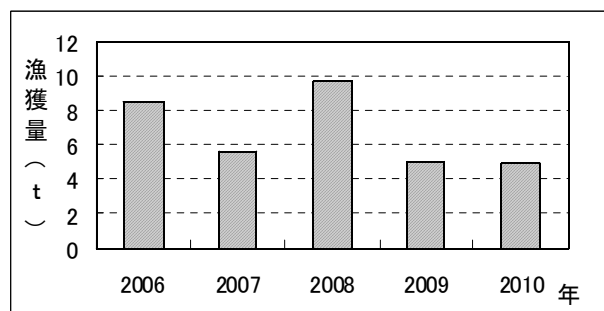
・トラフグ資源調査に初着手

水産研究所では平成23年度から5か年の新規課題として、トラフグの資源回復を目的とした調査に着手した。当研究所において、本種を対象とした初めての本格調査となる。

トラフグはふぐ刺し、ふぐちり等の食材となるなど、フグ類中でも最高級魚であるが、近年、全国的に漁獲量の減少が著しく、サワラ同様に国の作成した計画に基づく資源回復措置が講じられている魚種のひとつである。県内では古くから春季に大型の産卵親魚が下津井・児島地区の袋待ち網で漁獲されるほか、夏季に10cm前後の当歳幼魚が日生及び笠岡地区の小型定置網等で漁獲され、重要な収入源となってきた。



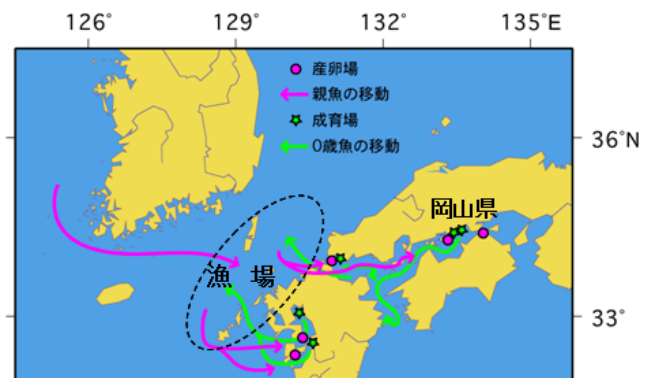
トラフグ(上)とシマフグ(下)稚魚
※H22年6月、吉井川河口、サーフネットで採捕



県内2水揚地のトラフグ親魚漁獲量の推移 (水研調べ)

一方、トラフグはサケ・マス類と同じく産卵回帰する広域回遊魚として知られ、日本海や東シナ海のはえ縄漁業で漁獲対象となる成魚の多くは、有明海や瀬戸内海の産卵場起源であることが確認されている。そこで、瀬戸内海及び北部九州の各県連携のもと、瀬戸内海の産卵・育成場由来の稚魚の動向とその保護効果を推定することで、新たな資源管理方を検討する。加えて、未解明なトラフグの回遊生態を明らかにし、資源増殖につなげようというもの。

「岡山の海で生まれ育った稚魚が遠く日本海、東シナ海に至って成長し、3歳になると親となって毎年春、産卵のため戻ってくる!？」そんなスケールの大きな自然界の動きを追い続け、資源回復につながる多くの成果を得たいと考えている。(資源増殖室)



トラフグの回遊経路